慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史的言語學に於ける比較の方法(アントワヌ・ メイエ著, 泉井久之助譯, 政經書院版)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.2 (1934. 8) ,p.165(343)- 166(344)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

舉げ、一々精細に研究し解說し、その系統を調査し、內容を比較して居り、更に我國でつくられた倭玉篇四十數種を舉げて、玉篇の我國に及ぼせる影響の大なるを示し、半島の地に刊行せられた韻會玉篇及び全韻玉篇、耶蘇會士によつて作られた小玉篇にまで言及してゐる。

後篇には玉篇逸文として、顧氏の原本のと思はれるもの一千七百九十一字、原本と趣を異にするもの三百四十九字、合計二千一百四十字が蒐錄されて居り、此の爲に涉獵した書は我國に於て二十五種、禹域のもの十二種、その字數は實に原本の八分の一に及んでゐるのである。

尙卷首に圖版二十（之に收められた諸本二十一）、卷末に前篇に論及せし文字及び重要なる事項の索引と、後篇たる玉篇逸文の索引とが附せられてゐる。

以上の如く本書は頗る該備であつて、之を一讀する者何人も著者が多年の努力に叩頭せざるを得まい。その僻遠の地に於て、多大の不便を忍びつゝなされたにも拘はらず、本書は堂々書籍研究の一範例として吾人に敎ふる所實に多大なるものがあるのである。（杉本忠）

史的言語學に於ける比較の方法

（アントワヌ・メイエ著　泉井久之助譯・政經書院版）

比較言語學に於けるメイエ敎授の位置に就ては呶呶を要しない。本書は敎授がオスロに設立された比較文化研究所開所記念講演に於てなした La méthode comparative en linguistique historique, 1925 を譯したものである。日本に於けるメイエ氏の紹介としては從來田邊壽利氏が De la méthode dans les sciences, 1911 中メイエ氏執筆にかゝる Linguistique の項目を「科學研究法」中に言語學として譯し、また最近國語科學講座中に「言語社會學」としてメイエ氏の斯學に於ける寄與を述べてをる位で未だ此の碩學の學風を傳へるに甚だ吝なるものがある。幸ひ泉井氏によつてメイエ氏著作中比較的はいり易い本書が先づ飜譯せられたことは吾人の欣快に堪えぬ所である。一體我國に於て佛國派言語學は多く傍系の學者によつて紹介せられてをりその本流が誤り解せられてをる嫌ひがある。たまたまソッシュールの本が譯されてをるため同人が今なほ重要な立役者の如く解せられたり、スキスのバイイ氏の著が紹介せられ、之が佛國言語學の代表である如く考へられたり甚だ遺憾な點が多い。泉井氏の譯著は此點に於て時宜に投ずるものである。聞く所によれば氏は更にメイエ氏の「印歐諸語比較研究序說」譯出の途上にあられるとか、同氏の精勵によりメイエ氏の精緻なる學風が日本に移殖せらるれば之によつて本邦學界の啓發される所極めて大であらう。世界の學會に於て殆ど未知なる分野を國の四周にめぐらして我國學界はあまりに徒手傍觀に過ぎた嫌ひがある。一體我國に於て言語學は著しく跛行的發展を遂げてをる。殊に我が東洋學に於て今少し言語學をとりいれる必要があらう。かの十九世紀代の比較言語學的方法などを今なほ言語學の眞面目なる如く考へ漫然言語學の輕重を問ふ人人はメイエ氏の著書によつて反省する必要があらう。もとより本

譯書の序文にメイエ氏自ら筆をとり印歐語比較の方法は極東語の研究にその儘眞似すべきでないと斷つてをられる如く吾人は西人の研究にたゞ追隨することは出來ぬが極東語比較研究の分野が邦人の手により開拓され、新たなる研究方法の提供せられんことは今日の緊急事であらう。

本書の原著は人に貸して今手許にないので譯書との校合をなすことが出來ぬが著者の學問的良心は既にタキトゥスの邦譯に於ても明かにされ、本譯書も充分信賴をもつて讀むことが出來る。ゞダンチクな學者に多い難解な譯語を使用することなくよく原語を挿入して理解に便ならしめ極めて明快に譯出してあるのは譯者の手腕の凡ならざることを示すものと云へやう。殊に廿四頁にわたる精密な補註を加へ、著者の論文著作目錄を添附し、「世界の言語」に掲載したメイエ氏の總序の譯を附加したりなど、譯書として近來稀に見る精密さを示し、なまじつかの著書より遙かに優つてをる。吾人は本書を凡そ言語に關心する士の是非机上に備へ玩味すべき書物として推薦する。因みに著者は新村博士門下の逸足、現に京都大學言語學の講師である（松本信廣）。

國語索引（鈴木隆一編　東方文化學院京都研究所刊）

近時漢籍索引の作成事業が各所に企てられつゝあることは斯界の爲欣ぶべき現象である。京都研究所の創設せられるや廿四史索引製作の企圖せられしことは坊間に傳えられたがその未だ發刊せられざる中に今度小島教授の指導の本に鈴木氏の作成せられし國語索引が先づ世に著はれ、多年の渴望を醫して吳れた。人名地名は云ふに及ばず各種事項を畫引によつて排列し一々その出所を列擧し綿密を極めてをる。此種の著作は製作者の適否によつて左右せられる所多く、或場合には全く使用に不便を感ずる場合が多い。此點に於て本書はさすがに指導及び製作その人を得たりと云ふべく周到なる注意の本に纂輯せられ、頗る使用便利なかつ利益する所多き出版である。本書の如き萬代を益する良書を提供された著者の勞苦に期して深く感謝する（松本信廣）。

日本精神生成史論　上代編（鈴木重雄　理想社出版部）

本書は日本の國の生立ち——著者鈴木重雄氏の眼に映つた日本の生立ち——の姿を寫したものである。氏は古事記日本書紀に對する用心と共に本書を讀む人は氏自身に對しても用心することが必要であるとされ、

私がこれから述べるところは、私に見えた日本の原形眞相であることは言ふまでもない。私に見えたものである以上、私の個性に依つて歪められて居るかも知れない。歪めるつもりは毛頭ないが、無意識の內にかかる結果を招いて居るかも知れない。

といはれるが、結局氏が自我意識から出發する以上氏の個性が表現されるのは當然であり、我々は氏の個性が表現されてゐる文化的生產として之を觀れば足りるのである。

元明の和銅五年（一三七二）元正の養老四年（一三八〇）に成立した古事記日本書紀に依つて、古い建國當時の眞の相が分るだ